

近代文学 7

戦後の文学

有斐閣双書

近代文学 7

戦後の文学

三好行雄 編
竹盛天雄



* 入門・基礎知識編 *

有斐閣双書

編 者 紹 介

み よし ゆき お
三 好 行 雄

大正15年生れ。昭和25年東京大学文学部卒業。

現 在 東京大学文学部教授。

たけ もり てん ゆう
竹 盛 天 雄

昭和3年生れ。昭和27年早稲田大学文学部卒業。

現 在 早稲田大学文学部教授。



有斐閣双書

近代文学 7 戦後の文学

昭和52年7月5日 初版第1刷印刷

昭和52年7月15日 初版第1刷発行

編 者	三 好 行 雄
	竹 盛 天 雄

発 行 者	え ぐさ ただ あつ 江 草 忠 允
-------	-----------------------

東京都千代田区神田神保町2~17

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

電 話 東 京 (264) 1 3 1 1 (大代表)
郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 株式会社精興社・製本 明泉堂製本所
© 1977, 三好行雄・竹盛天雄. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価は外函に表示してあります

はしがき

最近の近代文学研究の盛行はまことにめざましく、卒業論文の段階でも、いささか比重を失した近代への傾斜がいわれはじめてからすでに久しい。小説家や批評家など、文壇のサイドからの発言もめだった現象となりつつある。近代文学が一箇の文学伝統として、〈現代〉を架けて問うに足る意味をようやく瞭然としてきたのであろうか。古典国文学からの相対的独立の問題をはじめ、近代文学史観の再検討、実証と論理の亀裂をめぐる方法論の再構築、新しい言語理論による表現構造論の要請など、刻下の研究者に強いられている重要な課題も多い。文学自体の概念の拡張によって、思想や政治の領域も、いやおうなく文学史(文学研究)の対象と化しつつある。

総じて、戦後に本格化した近代文学研究も三〇年を経て、明らかに重大な転換点を迎えてつつある。それは研究方法の多岐な分化と混乱、研究領域の拡大と多彩化などをともなう、ひとを一種の迷路に踏みまよわせる観さえある。迷路は、月々に量産される膨大な研究論文の数によっても象徴される。とくに研究の第一歩を踏み

だそうとする人びとにとって、氾濫する情報の渦は時として、いたずらな混沌と徒勞を強いるだけであろうし、ことは学生を指導する立場の教師にとっても同断である。

こうした時機に、評論と研究とをあわせて過去の歴大な業績に史的整理をあたえ、その到達点と残された問題を明らかにすることは、旧来の水準を越えて、近代文学研究の新たな発展と飛躍をうながすためにも必須の課題だといえよう。本シリーズは、そうした要請に応えるものとして企画されたが、従来の類書が多く踏襲してきた作家別（ないし作品別）の展望に終始することを避け、ひろく近代文学研究上の核心となるべき問題点を選択し、個々のテーマに応じた史的整理を試みている。テーマの選択は研究者の関心が深く、したがって業績の積みかさねの多い問題を主とし、同時に、研究の進展に即応した新しい課題にも留意した。個々の叙述は原則として、(一)問題の所在、(二)主要な研究業績の史的整理、(三)今後の課題・方向の指示の三点を骨子としたが、テーマによっては、それによりふさわしい叙述がなされた場合もある。

全一〇巻の構成は小説・評論を中心に、ほぼ時代の流れに沿って区分した第1～7巻と、近代および現代の詩歌を対象とする第8、9巻、研究上の重要な主題と方

法を展望した第10巻からなる。現段階で、必要な問題点はおおむね網羅したと信じるが、幸いに、多くのすぐれた研究者の協力を得て、所期の目的を十分に達しえた
と自負している。

本シリーズの刊行が研究者、あるいは研究をこころざす人びとへの指針を提供し、
そしてまた、ひろく近代文学の読者にとっても鑑賞・享受の一助となりうることを
期待したい。最後に、編集から刊行までの過程で、有斐閣編集部の澤井洋紀・千葉
美代子・林喜代子の諸氏に多大の援助を受けた。記して謝意を表する。

昭和五二年五月

三好 行雄
竹盛 天雄

*執筆者紹介

(執筆順)

たに ざわ えい いち
谷 沢 永 一
お がさ わら まさる
小 笠 原 克
ふる ばやし たかし
古 林 尚
い ず とし ひこ
伊 豆 利 彦
さか がみ ひろ いち
坂 上 博 一
は とり 徹 や
羽 鳥 部 芳 紀
わた べ よし のり
渡 部 芳 紀
く ぼ たし たろう
久 保 田 芳 太 郎
とり い く お
鳥 居 邦 朗
しお ざき ふみ お
塩 崎 文 雄
の ざか ゆき ひろ
野 坂 幸 弘
こ く ぼ みのる
小 久 保 実
いし ざき ひとし
石 崎 純 等
いけ だ じゅん いち
池 田 純 溢
さ とろ あき お
佐 藤 昭 夫
まつ しん いち
松 原 新 一
くり つば よし き
栗 坪 良 樹
たけ だ かつ ひこ
武 田 勝 彦
お く ぼ つね お
大 久 保 典 夫
すが い き 幸 雄
菅 井 幸 雄

関西大学文学部教授

藤女子大学文学部教授

法政大学文学部講師

横浜市立大学文理学部教授

明治大学政治経済学部教授

鶴見大学文学部教授

中央大学文学部助教授

東横学園女子短期大学教授

武蔵大学人文学部教授

和光大学人文学部助教授

岩手大学教育学部助教授

帝塚山学院大学文学部教授

跡見学園短期大学講師

静岡大学教育学部講師

実践女子大学文学部助教授

文芸評論家

麻布高校教諭

早稲田大学政治経済学部教授

東京学芸大学教育学部教授

明治大学文学部教授

目次

はしがき

1 文学における「戦後」……………谷沢 永一 1

新しい特性的な文学(1) どころから戦後文学は出発すべきか(2) 近代文学の日本的空白(3) 放たれる批判の矢(5) 戦後小説の発想法を養い育てる(6) 戦後文学に力点をおいた戦後の文学の見取図(7) 戦後文学は終わった(9) 転向者または戦争傍観者の文学(10) 戦後文学は幻影だった(11) 「戦後派」文学論ではない戦後文学論(12)

2 「政治と文学」論争の評価……………小笠原 克 14

幻想の「文芸復興」(14) 新日本文学会対『近代文学』(15) 平野謙「ひとつの反措定」(16) 荒正人の場合(17) 中野重治「批評の人間性」(18) 白井吉見の論争展望(19) 三好行雄「戦後派ノオト」(21) 尾を曳く本質的問題(22) 平野謙の論争回顧(22) 中野重治の反芻(24)

3 文学者の戦争責任……………古 林 尚 26

『文学時標』のこと(26) 戦争下の言論統制(28) 新日本文学会の結成(31)
戦争責任の告発(32) 戦争責任論の変質(34)

4

民主主義文学の評価……………伊豆 利彦 36

民主主義文学の提唱(36) プロレタリア文学と民主主義文学(37) 『近代文学』同人の批判(39) 小田切秀雄の民主主義文学論(39) 百合子の文学の評価(41) 『人民文学』の主張(42) 国民文学論の主張(43) 民主主義文学の立場(45)

5

谷崎潤一郎の「戦後」……………坂上 博一 47

思想性の有無(47) 「細雪」への毀誉褒貶(48) 「細雪」と「源氏物語」など(50) 「少将滋幹の母」の問題(51) 「鍵」の評価(53) 「夢の浮橋」の問題(54) 最後の傑作「瘋癲老人日記」(56) 文学史への挑戦(56)

6

川端康成の「戦後」……………羽鳥 徹哉 58

いくつかの問題点(58) 川端文学の否定と肯定(59) 敗戦の受けとめ方(60) 川端における伝統(61) 文学と社会的行動(63) 昭和二十九年の変り目(64) 〈魔界〉をめぐる(65) 死をどうとらえるか(66) これからの課題(67)

7

小説の「戦後」

..... 渡部 芳紀

69

小説の「戦後」の三つの側面(69)

小説論の盛況(69)

小説論の研

究(71)

上林暁の評価(73)

尾崎一雄の評価(75)

外村繁の評価(77)

小説研究の課題(78)

8

「墮落論」の位置

..... 久保田芳太郎

80

魔墟からの叫び(80)

戦後体制への批判(81)

人間存在への認識(82)

生への指針(83)

後代への影響(85)

否定的見解(86)

今日への遺産(87)

9

太宰治の「無頼」

..... 鳥居 邦朗

88

〈リベルタン〉のアーキズム志向(88)

「名門意識」の内実(89)

太宰と

コミニズム(90)

「罪」の意識の発生(92)

〈生活演技説〉(93)

太宰

研究の現状(95)

太宰文学の位置(96)

10

石川淳の方法

..... 塩崎 文雄

98

作家的出発と散文理論(98)

「普賢」の同時代評(99)

戦後の活躍と『近

代文学』同人たちの評価(100)

新戯作派論議の周辺(102)

神西清と寺田

透(103)

革命小説前後(103)

「紫苑物語」以後(105)

二つの達成——井

沢義雄と野口武彦(105)

昨今の研究動向(106)

伊藤整の方法論

野坂 幸弘

109

問題の所在(109)
論への関心(114)刊行前後の反応(110)
昭和四〇年代前半(116)ブームのなかで(111) 「芸」の理
新段階(118) 今後の課題(120)

「暗い絵」の評価

小久保 実

121

戦後文学の発端(121)
題(124) 知識人の道(125)
新たな照射(129)戦後文学と民主主義文学(122)
意識と行動(126) 二〇世紀文学の課
新世代からの批判(128)

埴谷雄高の位置

石 崎 等

131

「死霊」伝説(131)
俊輔と吉本隆明(137)肯定と否定(132) 政治的季節の中の蘇生(136)
作家論輩出と今後の展望(139) 鶴見

大岡昇平の方法

池 田 純 益

142

「俘虜記」と《作家》であること(142)
析をめぐって(143) 《私》と戦争の対決——心理分析の方法(145)
した私」と《政治化した私》(147)
さ(149) 「野火」の位置(150)「俘虜記」への偏見と洞見——心理分
「武蔵野夫人」の謎——自然描写の美し

15

「第三の新人」の評価……………佐藤昭夫

152

登場の背景(152) 原体験と文学の特質(155) 「第三の新人」に対する評

価(157) 作家の特質(159) 評価をめぐる課題(161)

16

戦後文学の命脈……………松原新一

162

戦後文学の継承者(162) 政治と文学(163) 大江健三郎と想像力(165) 高

橋和巳の「戦後文学私論」(167) 小田実『鎖国』の文学』(169)

17

純文学の変質……………栗坪良樹

172

論争の発端(172) 平野謙の〈純文学〉と論争の焦点(175) 論争の展開(177)

平野謙の昭和文学史観(178)

18

三島由紀夫の生と死……………武田勝彦

180

問題点の展開(180) 自殺の条件(182) 悠久の大義(184) 死と美と生(186)

死とエロス(188) 生を越えるもの(189)

19

戦後批評への反措定……………大久保典夫

192

反措定の系譜(192) 審美主義的批評の抬頭(193) 審美主義的批評の展開(195)

超越性への志向(197) 吉本・江藤の位相(198) 「戦後派」批判への問題点(200)

20

戯曲における戦後性

菅井 幸雄

203

問題の視角—時代と主題(203) 戦後の出発(1)—リアリズム路線の継承(204)
戦後の出発(2)—喜劇の系譜(206) 戦後の出発(3)—古典と現代との関
連(207) 現実の反映としての戯曲の創造—方法論の展開(209) 戯曲の変
革の方向性(212)

1 文学における「戦後」

新しい特性的な文学

瀬沼茂樹は「戦後文学の出発
——椎名・野間・中村・梅崎

の作品」(『日本読書新聞』昭22・11・5)の冒頭に、(戦後生活の新しい条件、あるいは様式のうちから、新しい特性的な文学が生まれようとしている。それは、この新しい条件や様式に適した新しい方法と形式への模写として、その実験のうちに現れている。こうした実験は、自己の文学的伝承にしばられない柔軟な若い世代の野心的な創造のうちに成立する。まず椎名麟三と野間宏とは、この戦後文学の新しい出発の二つの方向として注目される)と記している。のち中島健蔵も「戦後文学の背景——一九四八年の文学をかえりみて」(『人間』昭23・12)で、(現代の烙印を、もっとも明瞭にあらわしている新しい作家が、

二人いる。野間宏と、椎名麟三とである)と認めた。座談会「戦後文学とその周辺」(『改造』昭23・12)では平田次三郎が、(今年一年の《戦後文学》の足跡というのは、野間宏と椎名麟三の二人に象徴的に現われていると思う)と捉え、(この二人を際立った例として、一般に戦後文学の道行きというのは、今まで素手で抵抗体にぶつかってきたままでいた状態から、抵抗体の正体を掴み取り、解きほぐし、それを超えようとする門口まで、まあ今年の戦後文学は野間、椎名を先頭として歩んできた)と見做している。荒正人は昭和二三年を対象とする「文学界の回顧」(『文芸年鑑』昭和二四年度、昭24・9、新潮社)の最初に「戦後文学」を採り上げ、(椎名麟三、梅崎春生、野間宏、中村真一郎の四人の新人はすでに戦後文学の

代表的作家として前年にその位置を定着させてきたのだが、それにつづいて所謂《第二の新人群》が登場をしはじめ、へそのなかで、武田泰淳、安部公房、島尾敏雄などが注目された」と報告し、へ昭和二三年の文学の動きのなかでもっとも留意に価いする現象は、戦後派文学の退却と素朴リアリズムの復帰とであらう」と要約した。『文芸』（編集長・杉森久英）が二回（昭²³・1、23・3）にわたって「戦後の世代」および「戦後の表情」と題する新人の写真集を掲げたとき、選ばれたのは、椎名麟三・野間宏・荒正人・花田清輝・福田恆存・坂口安吾・加藤周一・窪田啓作・梅崎春生・中村真一郎・船山馨・本多秋五・平野謙・武田泰淳・埴谷雄高・三島由紀夫・平田次三郎・寺田透の一八名。往年の『文章世界』や『文章倶楽部』のような投書欄重視の啓蒙雑誌を除外すれば、文芸雑誌が新人の顔写真を一括して載せたのはほとんど空前絶後の例であり、おりしも極端な用紙難の時代、本文がわずか七二ページおよび四八ページの時であっただけに、若年の一読者であ

った私などにも印象はなはだ強烈であった。

どこから戦後文学 平野謙は『戦後文芸評論』（昭

は出発すべきか 23・7、真善美社）の「あとがき」

に、へ私がここで提起した主題は、どこから戦後文学は出発すべきか、の一点にかかつてゐる」と記し、小田切秀雄は『人間と文学』（昭²¹・8、河出書房）の「あとがき」に、へ私たちの自身の傷を自身でつつき出し、つつき出すことで自身を破りつつ、新しい人間を求めて行かねばならぬ」と書き留め、荒正人は『戦後』（昭²³・10、近代文学社）の「後記」で、へインテリゲンチヤいかに生くべきか——わたくしは戦後三年を通じてこのテーマと取組んできた」と語り、佐々木基一は『個性復興』（昭²³・5、真善美社）の「後記」に、へ戦後のものを書くモチーフはへ文学者の使命の自覚といふ点に重点が置かれてゐる」と記し、本多秋五は『小林秀雄論』（昭²⁴・1、近代文学社）の「あとがき」に、へ小林秀雄と宮本百合子」というテーマを、へ僕個有の機縁から生じた、昭和文学理論の一つの決算報告だ」と自認し、埴谷雄高

1 文学における「戦後」

は座談会「文学者の責務」(『人間』昭21・4)のなかで、へ日本においては、ルネサンスといふとをかしいが、人間的立場を築く。文学上の問題は戦争責任よりも近代文学の確立だよ」と提言している。このような『近代文学』同人の主張に対して早く伊藤整は「新人的なもの」(『書評』昭21・12)において、へ私のごときは、この雑誌で指摘してゐる一切の悪と病弱とを自分の内部に感じて慄然とした次第である。そして私は、この雑誌が、まるで怒濤のやうに批判精神にあふれてゐるのを知つた。私見によれば、現代文学の批判精神はこれ等の諸氏によつて、先づ健全であり、久しい間の萎縮癖から放たれたやうだ」と評し、「終戦二年目の文学概観」(『創作代表作選集』昭和二二年度版、昭23・8、大日本雄弁会講談社)では、

『雑誌『近代文学』は『新日本文学』が代表するところの戦前からのプロレタリア文学の理論を、近代人のエゴの場において心理的な安定感から訂正しようとする傾向を持つ批評家の集団として、

戦後出発した。近代の日本文学の再検討とともに現代小説を方法的に考へようとする意図が顕著であつた。さういふ点でこの雑誌の平野謙、荒正人等が、中野・岩上・小田切等とはげしい論争を行つた。外に佐々木基一、本多秋五、福田恆存等がこの雑誌で仕事をした。一九四七年夏頃から、同人を増加して、新しい作家の理論的な支点たる観があつた。』と概括している。

近代文学の日本的空白

野間宏の「暗い絵」第一回(『黄蜂』昭21・4)が出たと

き、本多秋五は「同人雑記」(『近代文学』昭21・9)で、へ新しい世代が自分達の思想決定期の考察にまで遡り彼等の独自性をその由来とともに呈示しやうとするのはいいことだ」と認め、へ野間宏の小説は埴谷雄高の《死霊》に酷似したところがある。さういへば、荒正人の論文は、自己の内的経験を告げること、熱狂的に自己の世代の独自性を主張しやうとしてゐる。かう考へて、現在における『近代文学』の

存在は、一際その意味を明瞭ならしめたやうに思ふのは我田引水だらうか」と認定した。平野謙は座談会「戦後文学とその周辺」〔改造〕昭23・12）において、

へだたい、戦後文学という名称ですね、あの名称自身すこしおかしいんじゃないかと思うんです。野間君にしても、椎名君にしても、埴谷君にしても、今、荒君が言ったように、段階の相違はあっても、とにかく左翼運動にかかわりをもち、その運動が目のまえでガラガラくずれてゆく経験を自己の内部で持っているわけだ。その経験を戦争中持ちこたえて来たわけです。そういう内的な経験が自己の文学上の出発点になっているということは動かせない事実だ。だから椎名君たちの文学的主题は左翼崩壊直後の問題を戦争中に屈折させ、変貌させていった、いわば《戦時文学》の一種でしょう。そういう点からいえば、今、荒君が言ったマチネ・ポエティクの人こそほんとうの《戦後文学》というふうに言っているんじゃないかと思

うんです。

と指摘した。白井吉見は「展望」〔「展望」昭22・7）において椎名麟三の「深夜の酒宴」〔「展望」昭22・2）を採り上げ、

《深夜の酒宴》は、自己の苦悩をまぎらさぬやう、いつもそれを自分にひき戻し、ひき戻してゐる。だから、この重さに堪へてゐることの告白だけで精いつばいであつて、他を見まはす余裕もなければ、《僕はすべてのものを一歩一歩問いつめてゆくのだ》といふムイシュキン公爵のやうに根源的に人間存在を問ひつめる切迫さはない。今のところこれが精いつばい、これの告白より手のないといふのがこの作品であり、極端にいふと作者のこのやうな誠実だけがこの作品を救つてゐるやうにおもふ。

と評し、《日常的習慣性を人生と信じてゐる素樸な自然主義的乃至私小説的作家と読者の雑踏してゐるなかにあなたの出現は限りない期待を抱かせずにはおきません》と呼びかけている。伊藤整は合評「新